※令和8年6月時点

日高山脈襟裳十勝国立公園（えりも町）のゼロカーボンパーク登録

1. えりも町と日高山脈襟裳十勝国立公園

えりも町は、北海道日高地方の南端に位置し、厳しい自然環境は豊かな漁場と景観を創り、「漁業と観光のまち」として発展してきた。

太平洋に突き出た「襟裳岬」は風極の地と呼ばれる日本屈指の強風地帯。ハート型の「豊似湖」、断崖絶壁の海岸が続く「黄金道路」など多くの景勝地を有しており、年間30万人以上の観光客が訪れている。

えりも町は、令和6年9月にゼロカーボンシティを表明。

襟裳岬

2. ゼロカーボンパークに向けたえりも町と地域の取組

①襟裳岬の森林再生

襟裳岬は国指定文化財「名勝ピリカノカ」に含まれる景勝地。かつては広葉樹の原生林で覆われていた。

明治以降の開拓で原生林は切り開かれ、昭和20年代後半には「えりも砂漠」と呼ばれるほど荒廃していた。飛散する赤土は海上10㎞沖合にも達し、沿岸生態系の劣化から漁業に大きな打撃を与えた。

砂漠となった百人浜

緑が蘇った百人浜

昭和28年から始まった緑化事業は、強風という条件から困難を呈したが、何年もの試行錯誤の結果、蒔いた種を雑海藻で覆うことで飛散を防ぐ「えりも式緑化工法」が生み出された。行政と地域住民が連携した70年に及ぶ取組が実を結び、現在は緑豊かな森林が蘇ってきている。

植樹祭の様子

2. ゼロカーボンパークに向けたえりも町と地域の取組

②CO2を排出しない自然体験プログラムの推進

ハートの形をした豊似湖、伊能忠敬や松浦武四郎が歩いた猿留山道、穏やかな海岸砂丘が続く百人浜など、景勝地を巡るフットパスコースを設定し、環境負荷に配慮しながら町の歴史と自然を学ぶ体験プログラムを提供している。

猿留山道を歩く様子

③産学官連携によるブルーカーボンの推進

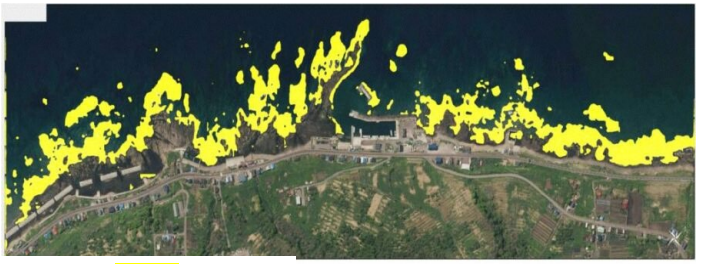
えりも漁業協同組合や北海道大学、国土交通省北海道開発局と連携し、天然コンブ漁場を活用したCO2吸収の調査研究を行うとともに、雑海藻の駆除などコンブの育成管理を行っている。

令和4年からは、ジャパンブルーエコノミー技術研究組合のJブルークレジット制度の認証を受け、サステナブルな漁業管理とクレジット収入を活用した藻場保護を推進している。

ブルーカーボン調査の様子

3. 環境省における対応

ゼロカーボンシティ支援に活用しているエネルギー対策特別会計予算及び自然公園等事業費等の既存予算を活用して支援する他、北海道地方環境事務所が連携をとりながら伴走支援を行い、ゼロカーボンパークの取組を後押し。



AIによる藻場領域の予測結果